実践に役立つ教育資料
―最近の研究紀要･資料から―

教育センターで受け入れた研究紀要や教育資料から、教育研究や教育実践に役立つ資料をいくつか紹介します。

学校組織を強化するプロセスマネジメント研修

独立行政法人教員研修センター(2007年6月)

本書では、プロセスマネジメントを学校において「リーダーが教職員の多様性を活かしつつ、学校経営計画を起点として組織の活動を設計・運営すること」と定義しています。プロセスマネジメントの眼目は、次の四つの活動段階（①「他人事にしない」Planting；「主体化」の種をまく②「自分の思いこみで判断しない」Diagnosis；現状を分析する③「『もぐらたたき』に陥らない」Clarify；課題を明らかにする④「絵に描いた餅は食べられない」Approach；解決策を立案し着手する）と「納得感」と「協働意欲」を醸成する教職員間のコミュニケーションの実践であると説明します。上記の４つの段階はいわいるＰＤＣＡサイクルとは異なっており「新ＰＤＣＡサイクル」と呼ぶことも新たな提案となっています。

低学年　生活･学習習慣指導の玉手箱

佐賀県教育センター(2007年3月)

子どもたちによりよい生活・学習習慣を身に付けさせていくことは、学力や社会性、道徳性を育成する上で大変重要であると言われています。本書では根気強く継続した指導を基本に、子ども自身が「自分で」「自分から」できるように内面化を図っていくために提案がされています。指導のポイントとして①遊びの要素を取り入れよう、②指示は視覚化しわかりやすくしよう、③教師との一対一の関係が大切、等の六つの指導のポイントを示し、それらの指導の実際場面を想定した計画まで盛り込んでいます。

仲間と共に授業から学ぶ

藤沢市教育文化センター　(2007年3月)

「授業を見る」ということの意味が実践を通して示されています。「カード構造化法」「参加者用振り返りシート」など様々な用具を利用して授業リフレクションを行いながら、自分の視点を記録することの大切さを訴えたり、見えることからの授業の再構築を目指したりしています。このような授業リフレクションを通して、仲間と共に授業から学ぶ関係を創り出していくことの必要性が語られています。

問いのある教育

琉球大学教育学部研究紀要　第 71 集(2007年8月)

教師からの問いが先にあるという視点だけでなく、学習者自身が「問いを立てる」ことの重要性について述べられています。学習者の質問の質を高めるために、質問の「型」を教えたり、問題に対して「本当に？」「どういう意味？」などの質問をぶつけることで「新しい問い」が生まれることを示しています。そして、学びの原動力としての質問に着目した授業について具体的に考察が加えられています。

実りある「総合的な学習の時間」の実現のためにー実践から学ぶ指導の充実とカリキュラムの改善ー

栃木県総合教育センター(2007年3月)

「総合的な学習の時間」を充実させるために、①各教科等との関連を図る、②課題を見付ける力を育てる、③主体的な追求活動を支援する、④児童に評価をフィードバックする、⑤教職員の協力体制を生かす、という五つの視点を挙げています。実践の成果や課題をカリキュラムの改善につなげるために、実践の記録や資料をその後の学習や指導に役立てるとともに、計画や実践を評価し、カリキュラムの改善につなげることの必要性を説明しています。

また、福島県教育センター Web の検索システムを活用し、必要な図書、文献、研究資料の検索番号やキーワードをご連絡いただければ、こちらで準備して発送します。是非ご活用ください。

※　教育資料等のお問い合わせについては、カリキュラムセンター（内線 33 番）までお願いします。